

【小論文】

解答例

- 問1 (1) 著者は、ヨーロッパの近代的技術だけが「科学的な根を持っており、この根からそれ特有の性格である限界を知らぬ進歩の可能性がもたされる」のに対し、その他の技術はそうではないという点で両者は異なると述べている。
- (2) 著者は、科学の体系化のためには「統合への努力」が必要、科学の発展のためには「科学者の専門分化」が必要と述べている。また科学の本質的進歩のためには、「時おり自己を再構成し直すこと」、さらにそのためには「日ごとに包括的な知識領域を取り込むこと」が必要であると示唆している。
- (3) 著者は、「大衆」とは「現代を代表しその上に君臨し支配している人間の階級もしくはそのあり方」を指すと述べている。また著者は、自分より上位の外部からの要請に対して「聞く耳を持たない」、従わない、ということをして「大衆」の特徴・条件として挙げている。

問2 19世紀のヨーロッパの科学に基づく技術の発展は、大衆を生み出し、同時に大衆の典型例としての専門家の台頭をもたらした。

大衆とは、科学技術がもたらした物質的豊かさを享受するものの、その豊かさがなぜもたらされたかを知らず、考えようともせず、自らの欲望を満たそうとするばかりの存在である。（「大衆」への批判）

社会をリードする科学者等の専門家は、現代の野蛮人である。なぜなら、宇宙の総合的解明がヨーロッパの科学、教養、文明であるのに、専門家は、狭く分割された自己の領域のことしか知らず、専門以外のことについては原始人のように無知であり、科学や文明の運命やそれとの連帯・連携にも関心がないからである。（「専門家」への批判）

専門家は、中途半端な資格を持つゆえに、自分の地位に満足し、自分の領域に閉じこもり、自らの使命を超えた要請にきく耳を持たない。その意味で専門家は上に述べた大衆の典型例である。かかる大衆と専門家の台頭はヨーロッパの危機である。この危機からの脱却のためには専門家と大衆が自らの無知を自覚し、文明とは何かについて明晰な考えをもち、知の体系化と再構成を繰り返す必要がある。

問3 解答例1

生命科学や情報技術の分野でみられるように科学の高度化と研究者の専門分化は現在もなお進んでいる。専門分化が進むことそれ自体が誤っているわけではない。問題は、現実の社会が複雑・多元的であるのに、専門家の知る領域が単純・一元的であることである。90年前に著者が警告したように、専門家に全体を俯瞰する大局観がなければ、均衡ある社会の発展は期待できない。専門主義へのこの警告は今日においても傾聴に値する。

法学・法律実務もまたその例外ではない。法曹も自己の専門領域に閉じこもることなく、常に広い視野を持って他の分野のことを謙虚に学ぶ必要がある。特に裁判員制度の時代にあっては、法曹の主張・行動には対社会的・分野横断的な正統性が求められる。そうした正統性を高めていくためには、法律や判例を所与のものとみなすのではなく、より高く広い見地から趣旨・背景を考察し、普遍性を追求し、目前の問題の解決を図り、そのことを通じてさらに自分の専門性を高めていく、そういうアプローチが必要である。専門性と分野横断的正統性を兼ね備えた専門家を目指していきたい。

そのために、法科大学院生として哲学・論理学・倫理学等の基礎法学をしっかりと学ぶこと、また実務家として他の分野の専門家又はジェネラリスト等との連携・交流を進めることなどに努めたい。本資料の読後感として、自分の領域を深く掘り下げつつ、同時に「知の総合化」への関心を失わないバランス感のある法曹を目指したいとの思いを新たにした次第である。

解答例2

著者の主張には疑問がある。著者は、専門家の「自律と自信の内的感覚そのもの」が「自分の専門領域の外でも支配的位置に立ちたいという願望ももたらす」と断定している。中にはそういう支配願望をもった性格の専門家もいるかもしれないが、そのような支配願望が専門主義から自動的に生じるとみることにはやや無理があるのではないか。当時の欧州を覆った閉塞感又は停滞感は、支配願望をもった専門家の跋扈によるというよりはむしろ、新生アメリカの発展やロシア革命の成立によるところが大きかったのではないか。

いずれにせよ、専門家が自己の領域に閉じこもりがちであることは著者の指摘を待つまでもなく、昔も今もそのとおりであると思う。その限りにおいて著者の指摘は正しく、専門主義のリスクは今日においてもなお存在する。我々、法律事務の専門家たる法曹を目指す者もまた、そのリスクについての自覚が必要である。したがって……（以下、上記「解答例1」の第2パラ以降とほぼ同様の展開）

以上